

都市の中での “みどり”のトレンドと環境価値

日比谷アメニスグループ植栽樹種データの比較から

私たち日比谷アメニスグループでは、持続可能な社会の実現のためさまざまな活動をおこなっており、私たちが提供する環境価値についてのデータを発表してきました。今回、ネイチャーポジティブの実現に向けて私たちが貢献できることは何かを考え、収集した自社データをもとに近年の都市緑化で植えられる樹木の傾向を整理しました。より生物多様性に配慮した魅力的な緑地空間の創出を目指し、樹木の生産や緑地設計の現場で役立つ情報を提供します。

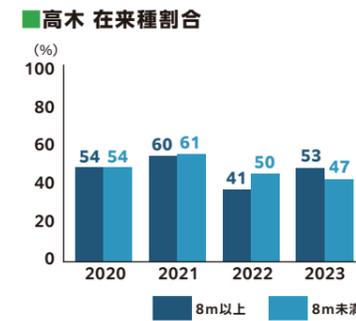
都市に植えられる樹木の動向

近年、植樹される樹木の種類は多様化しており、その数は年々増加しています。これは、生物多様性の保全や、自然との共生を目指す「ネイチャーポジティブ」という概念が注目されていることを反映していると考えられます。今回の分析では、高木・中木・低木ごとに、年度別の植樹本数ランキングの動向を整理し、都市緑化における樹種選択のトレンドを詳しく調べました。

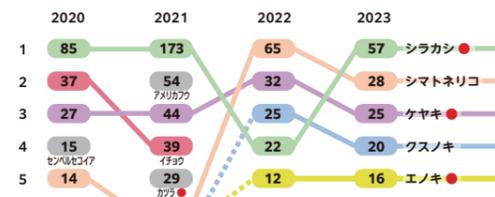


高木の動向

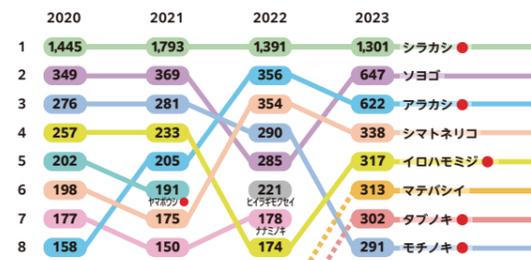
高木の在来種割合は全体の50%前後を占め、一定の割合を維持しています。8m以上の高木は、主にシンボルツリーとして目立つ場所に植えられ、風を防ぐ防風植栽として利用されます。こうした大きな木を育てるには長い時間がかかるため、多く植えられる樹種は年により大きく変動しています。また、場所の条件や建物のデザインによっても選択される樹種が変化することが予測できます。一方、8mより低い高木については、利用される樹種が比較的安定しています。しかし、近年は用いられる樹種の多様化で、特定の樹種が以前ほど多く植えられなくなったことが見えてきます。



高木(8m ≤ 樹高) 樹種別植樹本数ランキング



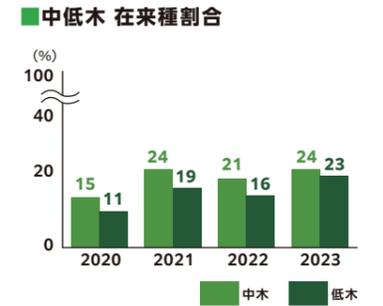
高木(3m ≤ 樹高 < 8m) 樹種別植樹本数ランキング



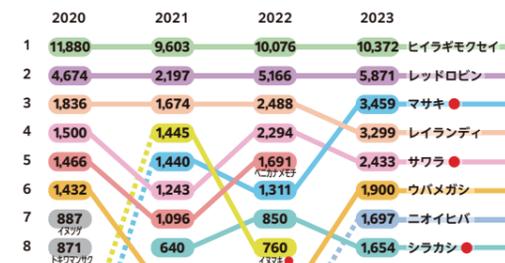
●は東京都の在来樹木を表します。(※1)

中低木の動向

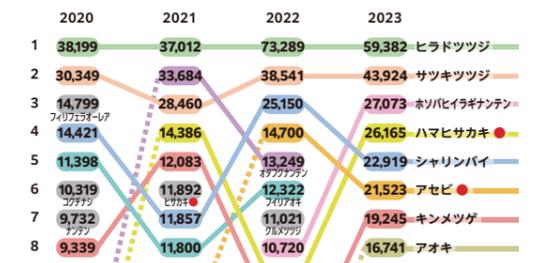
中木、低木ともに植樹樹種が多様化しているとともに、植樹本数に占める在来種の割合も微増傾向にあります。中木は年による変動が比較的小さいことが特徴です。特に常緑中木は生垣に用いられることが多く、ヒラギモクセイやレッドロビン等の生垣用樹種は安定した人気を誇っています。その中で、近年は在来種であるマサキ等が力を伸ばしています。低木は年ごとの変動が大きいです。ツツジ類の根強い人気がかえります。ヒラギナンテンが生態系被害防止外来種リスト(環境省)でその他の総合対策外来種に指定されたため、代替樹種としてホソバヒラギナンテンが台頭してきています。



中木(1.5m ≤ 樹高 < 3m) 樹種別植樹本数ランキング



低木(樹高 < 1.5m) 樹種別植樹本数ランキング



●は東京都の在来樹木を表します。(※1)

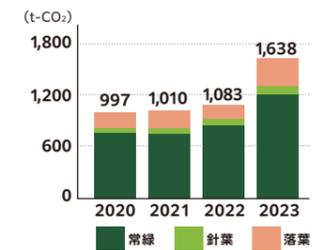
樹木植栽と カーボンニュートラル

植樹した樹木本数と樹種分類から、年間で樹木が吸収する二酸化炭素量を算出しました。樹種分類ごとに見ると、植樹本数、二酸化炭素吸収量ともに常緑樹の割合が多くなっていました。また、高木は植樹本数割合に対してCO₂吸収量に占める割合が多くなっていました。CO₂吸収量の計算には目通り幹周(高さ1.2mの位置の幹の周長)が大きく影響します。樹種ごとに目通り幹周の傾向は異なっていることから、今後は樹種の違いによるCO₂吸収量についても調査を進めていきます。

樹種分類別 高中木植樹本数



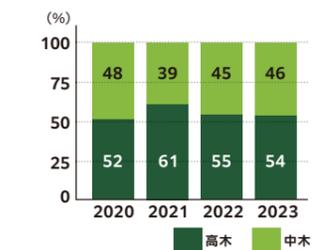
樹種分類別 CO₂ 吸収量(※2)



高中木 植樹本数割合



高中木 CO₂ 吸収量割合



※1 東京都の在来樹種割合の算出に当たっては、アメニスグループで植樹した樹木を、東京都環境局の在来種選定ガイドライン(https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/green/green_biodiv/ns_guidelines/)に記載されている「東京都本土部における植栽のための在来種リスト」に照らし合わせて分析を行いました。

※2 二酸化炭素吸収量の算出に当たっては、アメニスグループにおける植樹した高中木の総本数を基に、国総研緑化生態研究所「都市緑化樹木のCO₂固定量の算出」を引用、胸高直径9cm未満は便宜上9cmとして扱い計算を行いました。また、株立形状の樹木については、弊社の蓄積したデータを基に、樹高から胸高直径を算出する回帰式を用いて計算を行いました。